

農作物を食い荒らされた蝗害を語り継ぐ文化財

## 手稲山口バッタ塚



明治13年～16年（1880～1883年）の4年間の出来事である。

十勝地方でトノサマバッタが大量発生し、十勝国と日高国・石狩国を隔てる日高山脈を越えて札幌にも大群で飛来し、農作物に重大な被害をもたらした。こういった集団で移動する習性・現象を飛蝗（ひこう）と呼び、飛蝗の通過地域の農作物は致命的な被害を受ける。蝗害の発端は十勝国。明治12年頃には所々でバッタの小群が確認されていたが、それが翌年に大量繁殖、日高・胆振地方に飛来。胆振地方で飛来が確認された1週間後には月寒村に飛来していた。

北海道蝗害報告書にはこう書かれている

「八月二十八日午後四時頃 東方より羽虫群集シ来リテ畑ニ下ル。…」

「三十日ニ至リテ粟ノ穂及ヒ葉ヲ喰フ…」

これにより、粟・稗・トウモロコシの葉、実が致命的な被害を受ける。

翌年（明治14年）の6月上旬には、前年産卵したトノサマバッタの卵が孵化し、特に上手稲村の山野で大量発生が確認された。同じく6月下旬には下手稲村の三樽別・星置、琴似村の山の手・十二軒（現在の宮の森周辺）で大量発生が確認された。当時開拓使では駆除方法を考案していたが、最終的には人手に頼りしかなかった。捕獲したバッタの卵・幼虫の買い取り制度を始め、買い取ったものを野焼きにて焼き殺した。この制度はかなりの効果があったが、他地方からの飛来が収まらず、「満点飛翔」「雪花ノ天ヨリ降ルカ如シ」と記録に残されている。

発生より翌々年（明治15）には、千歳で発生した大群が札幌を襲った。

発生より4年目（明治16）は、7月に山鼻で大量発生し、札幌に侵入してきた。周辺の村では火を焚いて焼き殺した。手稲山口のバッタ塚には卵駆除の際に掘り起こした土ごと運ばれ高塚が出来たもので、不毛の地である砂地に列状に並べたもので、大量に塚があったが、現在では一部が札幌市の文化財として保存されている。

【参考文献 さっぽろ文庫】

Dear... From Hokkaido 北海道の歴史を歩く

<http://dearfromhokkaido.sakura.ne.jp/>